

「聖餐式の恵みと意義」

I コリント11：23-28

堀田修一 22・10・2

I 旧約聖書の過越の祭との関係

「イエスは彼らに言われた。『わたしは、苦しみ（私たちの罪のための十字架の苦しみ）を受ける前に、あなたがたと一緒にこの過越の食事をするのを、切に願っていました。あなたがたに言います。過越が神の国において成就するまで、わたしは過越の食事をするのは、決してありません』ルカ22：15，16。主の十字架の前のこの過越の祭は最後になり、主は、過越の祭りが指し示していた主の十字架の贖いが成就した後、主は聖餐式を制定され、この二千年間、聖書的な教会は、聖餐式を大切にしている。過越の祭で食べられる「種なしパン」は、十字架にささげられた罪のない主のからだを示していた。出12：8，20。Iコリント5：6-8。子羊（「過越の子羊キリスト」Iコリント5：7）が屠られ、その血が取られ、家々の門柱と鴨居に塗られた。出12：5-7。「過越のいけにえを屠りなさい。…血を鴨居と二本の門柱に塗りつけなさい。…主はエジプトを打つために行き巡られる。しかし、鴨居と二本の門柱にある血を見たら、主はその戸口を過ぎ越して、滅ぼす者があなたがたの家に入って打つことがないようにされる」出12：21-23。私は、47年前にこの映画を見たときに主の十字架の血の深い意味をますます実感させられた。私たちが、主の十字架の血が私の罪の償いのためと信じるとき、私たちの心に主の十字架の尊い血の恵みが与えられるのである。神は、私たちの心にある主の十字架の血の恵みへの信仰をご覧になり、永遠の滅びを「過ぎ越し」、罪の赦しと救いを与えてくださる。旧約の民は、強力なエジプトから脱出させられた神の救い＝出エジプトの偉大な恵みを忘れず記念し、覚え、いつも神の恵みに感謝するように過越の祭を守った。新約時代の神の民、私たちは、主の十字架の恵みにより、神が永遠の滅びから救い出してくださった恵み（霊的な出エジプト）を忘れず、記念し、いつも覚えて心から神に感謝して聖餐式を大切に行いたい。

II 聖餐式の深い意味

「主イエスは渡される夜」：24。「渡される」という言葉は、主が「時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます」（マルコ14：41）という神の定めを理解しておられたことを含む。「感謝の祈りをささげ」：24。主は、いつも感謝を最初にささげられる。マタイ26：26では「イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた」とある。主は、神への感謝、神をほめたたえることを第一とされた。ヨハネ6：11。主の祈り「御名があがめられますように」と一致する。この感謝は、人類の救いに対しての神の深いご計画への感謝。この神の深い愛のご計画を思い巡らしつつ聖餐式に与りたい。「パンを取り…それを裂き」。パンは主が十字架にささげられた御からだが私たちの罪のために裂かれ、罪の刑罰として私たちの身代わりに苦しみを十分に味わわれたことを示す。聖餐式のパンは、もう一つの深い意味がある。「パンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。パンは一つですから、私たちは大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから」Iコリント10：16，17。主の十字架の御からだを示すパンを私たち

が感謝していただくことは、私たちがキリストの命にあずかる私たちが、キリストのからだなる教会という一体性の中に入れられている恵みに注目すること。聖餐式は、キリストのからだである教会に組み入れられて兄弟姉妹と一体となる礼典。「これは、あなたがたのための、わたしのからだです」：24。「あなたがたのため」とは、「あなたがたの贖いのため」「あなたがたの罪のための身代わりとしてのいけにえ」という意味。「わたしを覚えて、これを行いなさい」：24。わたしを「覚えて」の原語：名詞形＝想起、回想、記念。動詞形＝思い出す、覚える、注意を促す。私たちの弱さは、主の恵みを忘れやすい事である。「主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな」詩篇103：2。聖餐式で、主の十字架の恵みを覚えると同時に、「わたしを」覚えてとは、救い主イエス様を深く思い、深く覚え、主と私たちの人格が霊的に結合する事が聖餐式の醍醐味。主も聖餐式で私たちのことを深く思い、覚え、特別に臨在して下さる。「食事の後」：25。福音書が伝える通り過越の食事の後。「この杯は、わたしの血による新しい契約です」。モーセを通して古い契約が結ばれた。「モーセはその血（動物のいけにえ）を取って、民に振りかけ、そして言った。『見よ。これは、これらのすべてのことばに基づいて、主があなたがたと結ばれる契約の血である』（出24：8）。旧約の「この幕屋は今の時を示す比喩です。それ（旧契約）にしたがって、ささげ物といけにえ（動物の血）が献げられますが、それらは礼拝する人の良心を完全にすることができません。…しかしキリストは…すばらしい事柄の大祭司として来られ、…雄やぎや子牛の血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました」（ヘブル9：9—12）。聖餐式の杯が示すのは、主の血による新しい完全な救いの契約！御名を崇めます。「飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい」：25。この意味は、主が最後の晩餐でなさったことを、その時だけでなく、聖霊降臨（ペンテコステ）に誕生する教会の制度、礼典として続けなさいというご命令。それ故、この二千年間、聖書的な全世界の教会は、聖餐式を大切に守り続けている。「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです」：26。これは、聖餐式において、目に見える聖なるパンと杯とその意味を語ることばにより、主の十字架の福音を告げ知らせ続けなさい。主の再臨の日までということ。すなわち、イエスが主であられること、その主が私たちの罪のために十字架でしなれたこと、その主の十字架の血によって新しい契約の民として教会が存在する恵み、しかも主は死に果てたのではなく今生きておられて「主の聖餐」に招き、もてなしておられること、そしてやがて神の時に「主が来られる」こと、つまりキリスト教、福音の中心教理のすべてが、聖餐式の全体を通して語り続けられている。「主が来られるまで主の死を告げ知らせる」とは、聖餐式は、主が再臨される時を待望させるもの。主の再び来られるまで、聖餐式の目に見える聖なる儀式と福音宣教により世界の多くの人々が救われるように祈り福音を語りたい。主が赦されたように赦し合えますように。

Ⅲ 聖餐式にあずかる正しい態度

「だれでも、自分自身を吟味（原語：検査、吟味）して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい」：28。一人一人、神に光を当てられ自分を吟味し、点検しご聖霊とみことばにより罪を示されればごまかすことなく神に罪を告白して十字架による完全な赦しをいただいて聖餐式に与りたい。自分自身を吟味してとある。他人をではなく自分自身をである。他の人の欠点ばかりをさばくのではなく、先ず自分自身の罪を悔い改めたい。「淫らな行ない、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術（占い）、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、遊興（悪にはまる遊び）」ガラテヤ5：19—21のみことばは、自己吟味に有益である。聖書的な自己

吟味（原語：検査する、吟味する、本物であることを証明する）とは、自分の罪を正直に認め告白することだけではなく、その自分の罪のために主が十字架で死なれ、罪の償いが完了していることを本気で信じているかの点検でもある。二つの間違いがある。

①少しも反省せず、神の前に自分が罪人であることを認めず、罪の告白、お詫びもせず、聖餐式に与ることは誤りである。Ⅰヨハネ1：8。

②健全な自己吟味は聖書的だが、自己吟味をして神に心から自分の罪をお詫びし、告白し、神は、主の十字架の恵みで赦しておられるのに、自分は神に赦されていないという思いに縛られ、自分を責め続けることも誤りである。コロサイ2：14。

「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪（主の十字架で償いが完了している）を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます」Ⅰヨハネ1：9。

祈り：主の十字架による聖餐式の恵みを心から感謝します。